

資料

本学の地域貢献事業における SDGs 講座の展開

寺井梨恵子^{1§}, 松本智里¹, 瀬戸清華¹

要 旨

2020年度から本学附属地域ケア総合センターの地域貢献事業で「わたしとみんなの未来を変えるSDGs」を開催している。本稿では、これまでに大学生や教職員、高校生、地域住民に向けて開催した研修会の概要と3つの研修会参加後のアンケート(自由記載)の内容を報告した。「SDGs de 地方創生」では、【自分の利益だけ考えても、まちは持続しない】などSDGsの本質や持続性、波及性に関する学びがあった。「風水害24」では、【災害時の自分の思考や行動の傾向を自覚する】ことで、日頃からの備えに関する気づきがあった。「認知症世界の歩き方」では、【行動の理由がわかると認知症の方への関わり方を再考できる】など、認知症で一括りにせず、その人に合わせて理解しサポートする必要性の気づきがあった。いずれにおいても、看護学生からは地域住民との関わり方や看護職としての気づきを得ており、本事業はESDを通して持続可能な社会づくりの担い手を育む機会となっていた。

キーワード SDGs, ESD, 看護, 大学生, 地域貢献

1. はじめに SDGs とは

SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) とは、2001年に策定されたMDGs (Millennium Development Goals: ミレニアム開発目標) の後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。17のゴールと169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っている¹⁾。SDGsの各ゴールとターゲットには、先進国にも途上国にも共通して存在している様々な問題が含まれていることが特徴である。例えば、貧困の是正、世代間・ジェンダー間の公平性、教育、健康と福祉、環境・自然保護などである。これらのゴールは世界各国が合意した世界共通の目標であり、「地球規模」でグローバルとローカルの両立を目指すことが求められている。日本の2023年のSDGs達成度ランキング²⁾を見ると、日本は世界166カ国の中で21位と最高11位から6年連続で後退している。達成できている目標 (Achievement) としては、「SDG 4: 質の高い教育をみんなに」、「SDG 9: 産業と技術革新の基盤をつくろう」の2つにとどまっている。一方で、最大の課題が残っている

(Major challenges remain) のは、「SDG 5: ジェンダー平等を実現しよう」、「SDG 12: つくる責任、つかう責任」、「SDG 13: 気候変動に具体的な対策を」、「SDG 14: 海の豊かさを守ろう」、「SDG 15: 陸の豊かさを守ろう」となっている。2023年は2030年までの「折り返し」の年にあたるが、世界全体のSDGs達成度はコロナ禍の影響もあり2022年時点でも67%弱にとどまっている。

SDGsの具体的な取り組みは各国に委ねられており、日本はSDGsアクションプラン³⁾を2017年に公表し、毎年内容を更新している。SDGsアクションプランは、SDGs実施指針に基づき、2030年までに目標を達成するために、「優先課題8分野」において政府が行う具体的な施策やその予算額を整理し、各事業の実施によるSDGsへの貢献を「見える化」することを目的として策定するものである。さらにSDGsアクションプランでは、重点事項を3つ掲げており、その中に「SDGsを原動力とした地方創生、強靱かつ環境に優しい魅力的なまちづくり」とあり、これに基づき、地方創生に向けた活動を行っている³⁾。地方創生とは、少子高齢化に歯止めをかけ、地域の人口減少と地域経済の縮小を克服し、将来にわたって成長力を確保することを目指している⁴⁾。そうした持続可能な社会の構築には、解決につながる知識や技能、価値観、行動が各ステークホルダーに求められる。

¹⁾ 石川県立看護大学
[§] 責任著者

このような持続可能な社会の創り手を育成するにはESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) が必要である。ESD⁵⁾は、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で我が国が提唱した考えであり、これまでユネスコを主導機関として国際的に取り組まれてきた。ESDは、SDGsのターゲットの1つとして位置付けられているだけでなく、SDGsの17全ての目標の実現に寄与するものであり、持続可能な開発目標を達成するために不可欠である質の高い教育の実現に貢献するもの⁵⁾とされている。ESDは、2020年度から順次実施されているわが国の新しい学習指導要領において、これからの学校教育や教育課程の役割として「持続可能な社会の創り手」となることができるようにすることが前文と総則において掲げられ、学校でも取り組まれ始めている。これまでESDに取り組んできた学校からは、ESDが、児童生徒の心の発達や自己肯定感の醸成に寄与することや、主体的・協働的に学ぶ力を高めることに大きく役立ったという報告⁶⁾が寄せられている。大学機関においても同様に、SDGsを達成するためのESDの推進が求められている。

さらに、私たちが目指す超スマート社会 (Society 5.0) は、一人一人の人間が中心となる社会である。こういった社会において求められる力として、経済協力開発機構 (OECD) では2030年を見据えて、子供たちが自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力を発揮しながら、新たな価値を創造する力、対立やジレンマを克服する力、責任ある行動を取る力という「変革を起こすコンピテンシー」を身に付けていくことを提言している⁷⁾。このように、世界的にもSDGsに貢献する親和性が高い教育が推進されている。

2. 大学でSDGsに取り組む意義

2017年に国際的な研究組織であるSDSN (Sustainable Development Solutions Network: 持続可能な発展ソリューションネットワーク) Australia/Pacificは、オーストラリア、ニュージーランドおよび太平洋地域の大学が、SDGsに取り組むためのガイド「Getting started with the SDGs in universities」を公表した⁸⁾。SDSNは国連が支援する持続可能な社会を実現するためのグローバルなネットワークである。当ガイドは、SDGsにおける大学の役割と示すとともに、大学

でのSDGs実施に参考となる情報を提供している。SDGsへの大学の貢献の全体像として「学習と教育: 持続可能な開発のための教育」, 「SDGsに関する研究」, 「SDGsに連携したガバナンスと業務」, 「学外へのリーダーシップ: 社会貢献 Public engagement」の4つを挙げている。

2.1 SDGsのための教育

教育は1つの目標 (SDG4) の焦点であるが、他のすべてのSDGsと緊密に連携しており、実装をサポートする上で重要な役割を果たしている。その理由は、質の高い教育は個人を通してコミュニティや国の開発成果の向上につながるため⁹⁾である。さらに、SDGsを実施するには、複合的な相互関係、不確実性、価値観の矛盾など、多面的で相互に関連した社会的、経済的、環境的課題に取り組む必要がある。これらの課題の多くが解決できなかった理由には、要素分解的思考や、人間という要素の無視、二元的な (あるいはその両方の) 解決策を探すと、人間の傾向があったことが実証されている¹⁰⁾。特に、SDGsの達成にはすべての目標の達成が必要となる。そのため、各目標間でのトレードオフが発生する場合には、トレードオフ構造を明らかとしたうえで、それが発生しない考えを創造する必要がある¹¹⁾。トレードオフ構造とは、何かを選ぶ際に他の何かを犠牲にしてしまう構造のことを意味している。このようなSDGs達成に関わる複雑さを通して思考し、パラダイムを超え、対話とコミュニケーションを通じて学び、深い内省を行う教育を、他の重要な技術や知識や職能教育と並行して行うことで、より効果的なSDGs実装者の育成を後押しし、すべてのSDGsの実装を加速するのに役立つ¹⁰⁾ことが指摘されている。このような指摘は、すべての教育にあてはまるため、看護学生においても例外ではなく、SDGsを通じた教育の機会を持つことの重要性も示唆しているといえる。看護系大学におけるSDGsの取り組みがHome Pageにおいて情報発信されているか調査した研究では、看護系大学290校の学科紹介においてSDGsの記載があった大学は1校、大学紹介のHome Pageに掲載があったのは53校であった¹²⁾ことを報告している。このことは、看護教育がSDGsと関係していることを認識していても、SDGs達成に向けての活動としてHome Pageを活用し、社会に発信している大学がほとんどなかったことを示している。

2.2 社会貢献・地域貢献

大学は、社会の利益のために知識の創造と教育に専念する場所として、SDGsの実施にリーダーシップを提供するために適している¹⁰⁾。具体的には、コミュニティのイベントやフォーラムで公開講座の開催によって、SDGsに対処するための市民参加を強化することができる。また、大学は中立的なプラットフォームとして異なるステークホルダーが集まりSDGsの実装の課題を率直に議論するための「安全な」スペースとなり得る。これらを通して、SDGs実施に関する分野横断的な対話と行動を開始し、促進することができる¹⁰⁾。ことも示されている。このように、大学にはSDGsにおいても地域貢献としての役割を發揮することが求められている。朝日新聞が2023年2月に行った5,000人規模のSDGs認知度調査¹³⁾では、「SDGsという言葉聞いたことがある」が87.0%と、2020年の45.6%から急増している。年代別で最も認知度が低かったのが20代の79.5%であった。SDGsへの関心が最も高かった年代は10代で72.4%、20代は45.8%で最も低かった。さらに、SDGs達成において重要だと思うものでは、いずれの年代においても「国(政府)の取り組み」を挙げる人が最も多かったが、「自分を含む個人の取り組み」を半数以上が挙げたのが10代のみであり、最も低かったのは20代の27.3%であった。これらのことから、SDGsを自分ごととして捉えていないことが窺える。さらに、SDGsのゴール達成には日本においても主要な課題が残されており、SDGs達成には官と民の両方がそれぞれ関与するかたちでの大胆な投資が必要²⁾と指摘されていることから、特に学生を含む20代のみならず、市民社会におけるSDGs学習の普及啓発の必要性も依然として顕在している。

3. 看護とSDGs

ICN (International Council of Nurses: 国際看護師協会)は、「SDGsのターゲットを実現させることで、私たちのコミュニティや家族の生活、そして私たち自身の健康までもが向上すると考えられるため、看護師もSDGsに注意を払わなければならない¹⁴⁾」と述べている。SDGsの実現はすべてのステークホルダーに求められており、看護者においても例外ではない。SDGsにはGoal 3(すべての人に健康と福祉を)など看護職が重点的に取り組む目標が含まれており、「あらゆる環境の全てのコミュニティにおける最初の保健医療ケア

提供者である看護師は、SDGs達成の鍵となる¹⁴⁾と指摘されている。特に、Goal 3で示された「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)」の実現に関しては、公正かつ強靱な保健システムの強化という包摂的な取り組みが目標として掲げられている。UHCの実現は、基本的な保健サービスから「誰ひとり取り残さない(No one will be left behind)」ために、貧困層の人々、妊婦や小児、高齢者や民族的・性的マイノリティなど、社会的弱者に支払い可能で品質が保証された保健サービスを提供することが喫緊の課題とされた。まさにUHCの基本理念は、1967年にプライマリ・ヘルス・ケア宣言によって示された「健康」に対する本質的で包摂的な取り組みの現代的な解釈であり、MDGsで注目された地球規模課題の普遍的かつ変革的な取り組みの斬新的な進展である¹⁵⁾。そのため、看護においてもSDGsを推進させていくことは重要であるといえる。日本看護協会では2019年からNursing NowキャンペーンでのSDGsへの展開を皮切りに「日本看護協会SDGs宣言」を行い、2022年度以降2030年までの間、重点政策をSDGsの3つの目標「3.すべての人に健康と福祉を」、「5.ジェンダー平等を実現しよう」、「8.働きがいも経済成長も」と関連づけて活動している¹⁶⁾。健康の社会的決定要因の是正に関して、地域保健分野における看護人材の果たす役割は、コミュニティの再生と団結の強化、住民の声を反映した政策立案と実施、さらに変革者としての社会運動の促進という役割の重要性が増してくることが予想されている¹⁷⁾。

4. 看護教育の意義と看護学生がSDGsを学ぶ意義

前項の通り、看護においてSDGsに取り組むことは重要であり、看護師養成機関でも教育においても同様である。看護学生に対するSDGsに関連した研究は、国内で2件報告されている。「看護学生のSDGsに関する意識」を調査した研究¹⁸⁾では、在宅看護学の授業において17の目標の中から感心のある目標番号を選び、目標番号に関する「SDGsすごろく」を作成していた。もう1件は母性看護学の科目の1コマにおいて「ジェンダーとヘルスプロモーション」について講義を行い、授業後アンケートの自由記載から「SDGsにおける平等の視点から看護学生が考えるジェンダー・バイアス」を明らかにしたもの¹⁹⁾であった。いずれも活動報告であり、今後の研究が期待される。

国外の研究では、ウクライナとカナダの看護大

学生が対面かつ国際的な環境下での1週間に亘るグループ学習を通して、人々や環境が互いにどのように関係しているのかについて共通の理解を深め、持続可能な開発の3つの側面（経済、社会、環境）に及ぼす影響について考えた教育実践の報告²⁰⁾があった。看護大学4年生108名を対象に国際的な健康と文化的能力に影響を与える要因を明らかにした研究²¹⁾では、文化的能力（Cultural confidence）とメタ認知が文化的コンピテンシーに影響を与える重要な要素であり、文化的コンピテンシーはグローバルヘルスコンピテンシーに影響を与える重要な要素であることを明らかにしている。トルコの看護大学生199名を対象にSDGsの意識尺度と関連要因を調査した研究²²⁾では、看護学生のSDGsに対する意識は男性よりも女性の意識が高いこと、SDGsと看護に関連性があると考えている学生はSDGs意識尺度のスコアが高かったことが報告された。

看護の観点から気候変動への取り組みに関するレビューでは、「看護師には気候変動、緩和、適応、回復力の取り組みに関連する政策や権利擁護の取り組みに携わる重要な機会がある。特に、国際看護協会を含む看護団体は、政策の観点から気候変動に取り組む上で主導的な役割を果たしている」²³⁾ことを報告している。看護教育においても同様であり、気候変動の議論は、学士課程から博士課程までの看護カリキュラムに組み込まれるべきであることも指摘している。看護師教育におけるサステナビリティカリキュラム²⁴⁾では、持続可能性と気候変動、健康とのつながりに関するカリキュラム全体に亘る教育方法について紹介している。この他、看護師教育にSDGsを取り入れることへの提言やそのプロセスを明らかにしている研究は、「SDGsを達成するための健康文化の構築」²⁵⁾や、「世界市民や健康的なコミュニティのためにSDGsを看護カリキュラムに組み込む」²⁶⁾について報告されていた。

これらのことから、大学の役割を果たす中で、看護学生が地域住民とSDGsに対して取り組むことは、学術とコミュニティのパートナーシップによって、コミュニティの健康を強化し、地域レベルでSDGsの実現を開始するための実践例として重要であるといえる。

5. 本学の地域貢献事業におけるSDGs講座

5.1 SDGs講座の概要

令和2年度（2020年）より、石川県立看護大

学附属地域ケア総合センターにおける地域貢献事業として「わたしとみんなの未来を変えるSDGs」（代表者：寺井梨恵子）を開始し、継続して実施している。この事業の位置づけは、SDGs実装プロセス⁸⁾の「Step 1 すでにしていることをマッピングする」と「Step 2 SDGsに取り組む能力と当事者意識の育成」である。

【目的】

学生と地域住民の交流を行いながら、SDGsに取り組むこと、ESDを通して持続可能な社会づくりの担い手を育む教育を行うことをねらいとした。短期的な目的として、地域住民および学生がSDGsを理解し、身近な課題として捉え、「わたしができること」から先ずは始めることを目的としている。長期的な目的として、学生の世代にとって2030年は通過点である。2025年から開始されるポストSDGsの検討開始を見越し、現在のSDGsを身近なこととして捉え、2045年までを考えた上で、バックキャストで未来を描く力をつけることも目的としている。

【研修概要】

本事業においては、SDGsに関する講演や、ゲーミフィケーション²⁷⁾を用いた研修を行っている。本稿では、ゲーミフィケーションを用いた3つの研修会について報告する。

5.2 SDGsと地方創生（SDGs de 地方創生カードゲーム体験会）

「SDGs de 地方創生カードゲーム体験会」²⁸⁾は、株式会社Project Designと特定非営利活動法人イシュープラスデザインとの共同開発によって生まれた、SDGsと地方創生の共通点・対話・協働を理解し、SDGsや地方創生に関する具体的なアクションに繋げる機会を提供するものである。参加者がある架空のまちの住人として6～48人でチームを組み、12年間の地方創生プロジェクトに取り組むビジネスゲームである。SDGsを基にした自分の志を形にしなが、持続可能なまちをつくるのがゴールになる。「SDGs de 地方創生」のまちの状態は「人口」「経済」「環境」「暮らし」の4つの指標で表され、何もしなければ徐々に人口が減っていく中で、12年後も持続可能なまち（豊かに過ごせるまち）となるのか、消滅可能性が高い都市になるのかはゲーム参加者1人1人の行動によって変化するゲームである。

これまでの実施状況を表1に、体験会の様子を図1に示した。

表1 SDGs de 地方創生カードゲーム体験会
実施状況

開催日	開催場所	参加人数
2021. 2. 23	石川県立看護大学	17名
2021. 4. 28	石川県立看護大学	6名
2021. 4. 29	石川県立看護大学	9名
2021. 8. 17	石川県立看護大学	8名
2022. 4. 21	石川県立看護大学	8名
2022. 5. 13	県内他大学	10名
2022. 6. 20	県内高校	19名
2022. 8. 4	石川県立看護大学	11名
2023. 2. 23	七塚生涯学習センター	8名
2023. 5. 25	県内他大学	12名
2023. 6. 24	県内高校	15名
	計	123名

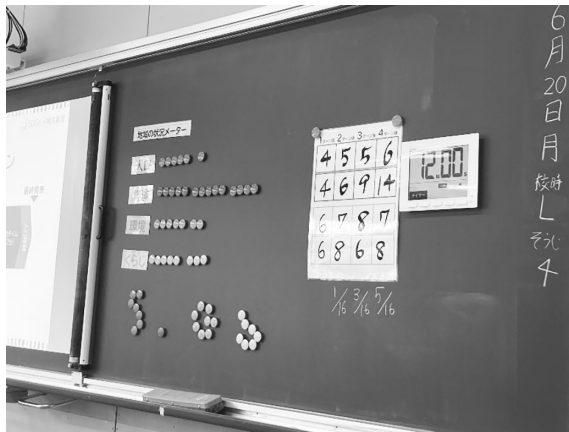


図1 SDGs de 地方創生カードゲーム体験会の様子

SDGs de 地方創生 体験会参加後のアンケート(体験後の感想についての自由記載)の結果を以下に示す。

1) 【SDGs が具体的に理解できた】

「SDGs は環境のことだと思っていたが、人々の生活を維持することやより豊かにするためにあるものだと学んだ」や、「現在の世界の現状と今後の関係について納得できた」、「人口や人材不足、経済面での課題など、シビアな現実が次々と浮かび上がってくる地方の状況を実感した」などゲームを通して、現在の局面と今後の世界について実感していた。

2) 【SDGs は自分の考えや行動にもつながっている】

「SDGs は世界規模のもので、自分に関係ないと思ってしまっていたが、誰も取り残さない・対話・連鎖など自分が少し気をつければ日常の中でできることがあると学んだ」や、「SDGs がどのような取り組みをしていて、それを達成するには

自分達はどんなことをしなければならないのか考えることができた」など、SDGs を身近なものとして捉える考え方の変化や自分も起点になれることの気づきがみられた。

3) 【自分の利益だけ考えても、まちは持続しない】

「人を動かすにはその人と自分の損得が偏らないようにして、合意を得ることが大切」や、「自分の利益にこだわりすぎず、地域全体の達成状況を広く見ることが大切」、「人口を上げるには、経済や暮らしにも目を向けないといけない」、「まちの変化は直接的ではなく、間接的に考えることで生じることに気づいた」など、持続性を考える場合の先見性と波及を捉えることの気づきであった。

4) 【自分の行動が思わぬ結果に連鎖する】

「私たちのグループは先に経済を盛り上げようとしたが、そうすると行政の資金が減少してしまった」、「経済を上げることはばかりに政策が偏ると環境や暮らしに影響し、結果的に他の人の目標も達成できないという体験をした」、「SDGs は17個の目標一つ一つがつながっている」など、連鎖やトレードオフ構造の体験や気づきであった。

5) 【SDGs の達成はひとりではできない】

「自分1人では良い町は作れず、他者に対話することでどんどん達成していった」や、「ゲーム内では、自分も他者も得意分野を生かして助け合おうという体験が得られた」、「SDGs も地方創生も、複雑な因果関係を持ち、全てのゴールを解決する難しさを体験できた」など、誰一人取り残さない、置き去りにしないこと、同時性の難しさを実感していた。

6) 【SDGs と看護との関連に気づく】

「看護としての傾聴力が活かされた」や、「患者さんの生活背景を考えやすくなったように感じる」、「一つでも欠けていたら実現できないということは、チーム医療にも重なるところがある」、「看護師になったら地域の方たちが安心して暮らしていけるような制度などを考えたい」、「この体験を多職種間との連携に活かしたい」など、ゲームを通して看護との関連も考えていた。

7) 【ゲームを通してコミュニケーションの大切さがわかった】

「私は良いと思ったことも立場が違えば捉え方が異なるので、共有することの大切さも改めて実感した」、「初めて会った人とも、ゲームを通して積極的に対話できた」、「学年・性別関係なく話すことができコミュニケーション力が高まっ

た」など、ゲームでの協働や対話を通して自然にコミュニケーションが取れていた。

5.3 防災教育（風水害 24）

「風水害 24」²⁹⁾ は、大規模風水害の接近から直撃・通過までの 24 時間をリアルに体験することを通じて、風水害発生時に必要な知識を学び、適切な判断や行動ができるような、風水害リテラシーを高めるプログラムである。

これまでの実施状況を表 2 に、体験会の様子を図 2 に示した。

風水害 24 体験会参加後のアンケート（体験後の感想についての自由記載）の結果を以下に示す。

1) 【災害時の自分の思考や行動の傾向を自覚する】

「今の自分が災害時にどんな対応をとり、その結果どうなるのかを知る事が出来て、役に立った」や、「慎重すぎてもいけないと気がついた」、「実際に災害時も私は確実に家で携帯を見てばかりで、被災してしまうと気づいた」など、災害シミュレーション下において自己の傾向に気づいていた。

2) 【災害発生時の行動や対応を知っておく必要性に気づく】

「何でも早めに行動することが大切」や、「車で渋滞や河川の氾濫等に巻き込まれる恐れがある」、「情報を早く収集して避難行動に移すことが大切」など、早期行動や行動方法に関する知識を獲得していた。

表 2 風水害 24 体験会 実施状況

開催日	開催場所	参加人数
2021. 7. 22	石川県立看護大学	11 名
2022. 1. 25	他大学オンライン	23 名
2023. 12. 20	石川県立看護大学	26 名
	計	60 名



図 2 風水害 24 の様子

3) 【ハザードマップを見るのが大切】

「災害が発生する前に、地域のハザードマップを確認しておくことが大切」や、「ハザードマップのことすら知らなかった」など発災前からハザードマップを確認することの重要性に関する感想であった。

4) 【防災グッズや地域の情報を日頃から集める】

「災害に対して防災グッズや感染予防グッズをどう備えておく必要があるか振り返ることができた」や「取り残された住民の多くは、情報を入手することが困難であったり、避難行動を取ることが難しい人が多かったため、そういう人が地域にいることを前提として情報を共有したり声をかけていくことが必要だと感じた」など、日頃から防災グッズだけではなく地域住民の情報を知っておくことの気づきであった。

5) 【人を救うことと自分の命を守ることの優先性】

シミュレーションでは避難途中で住民の救出もミッションとしてあったため、「自分の命と人の命を救うことのバランスが難しい」という被災状況下での優先度に関する感想も挙げられた。

5.4 認知症の理解（認知症世界の歩き方）

認知症世界の歩き方³⁰⁾ は、認知症未来共創ハブが実施した認知症のある方約 100 名へのインタビューをもとに、当事者の思い・体験から 14 のストーリーとして作成されたプログラムである。ストーリーには、暮らしの中のさまざまなシーンで引き起こされる「148 の困りごと」と、その背景の一つとして考えられる「44 の心身機能障害」が結び付けられている。参加者が 4 名程度でグループを作り、認知症のある方が見えている景色、抱えている心身機能障害を理解し、参加者との対話を通じて、認知症とともに暮らしやすい社会を作るために私たちに何ができるかを思考するプログラムである。

これまでの実施状況を表 3 に、体験会の様子を図 3 に示した。

認知症世界の歩き方参加後のアンケート（体験後の感想についての自由記載）の結果を以下に示す。

1) 【認知症のイメージが変わった】

「認知症に対して、その人が何を考えているのか、どう接したら良いのかなど分からないことが多く、関わるのが怖いというイメージがあった」や、「参加する前は、物忘れや徘徊がメインであ

表3 認知症世界の歩き方 実施状況

開催日	開催場所	参加人数
2022. 4. 21	本学オンライン	13名
2023. 1. 31	県内他大学	14名
2023. 2. 2	かほく市いきいき講座	22名
2023. 2. 23	七塚生涯学習センター	7名
2023. 7. 19	県内高校	54名
2023. 11. 7	津幡町社会福祉協議会	50名
	計	160名



図3 認知症世界の歩き方ダイアログの様子

るイメージだった」など、研修会参加による認知症イメージの変化の自覚であった。

2)【認知症の症状はさまざま、人によって異なる】

「認知症の症状は人によって異なり、様々な症状がある」、「認知症は、この症状であると断言するのはではなく人によって違う」など、多様な症状や個人で異なることに関する気づきであった。

3)【本人にとっては症状や困りごとは真実】

「周囲からはおかしいと思うことでも、症状、本人の困りごと自体は真実である」、「入浴を拒否したり、物盗られに固執したり、認知症の方によくみられる行動がなぜ起きているのかわかった」、「生活でのさまざまな障害に直面し、本人も本当はしたいのにできないため葛藤している」など、周囲の視点ではなく本人の視点から否定せずに理解することの大切さを感じていた。

4)【本人の思いや、やりたいことを大切にしたい】

「認知症の方自身は、普段できていたことが急に衰えていたり、忘れてしまったり他者から嫌な顔をされたり辛いだろう」や、「本人がやりたいこととできることを理解した上で否定したり、制限したりしすぎずに、本人の意思も尊重したい」など、本人の思いに注目しながら強みを生かした関わり方を見出していた。

5)【行動の原因がわかると認知症の方への関わり方を再考できる】

「差別や偏見などはせず、その人その人の症状や状態をもっと『理解』できる人間になりたい」「その方にとって何が良いのかステレオタイプの考えを脱したい」など、認知症に対する偏見への自覚から、今後の関わり方への決意であった。

6)【住みやすい生活環境を整えることもサポートのひとつ】

「高齢者や認知症の方は環境によっても困りごとが生じる」や、「生活環境をデザインの視点で暮らしやすくなる工夫がわかった」など、環境面から誰もが過ごしやすいユニバーサルデザインの視点についても気づいていた。

7)【認知症の方が暮らしやすい社会は地域全体で作る】

「家族だけではなく地域全体で支えていくことが重要である」や、「今日使ったカードでは認知症の方自身も自分の状態を把握でき、家族も周囲も何ができて何が困っているのか理解することにつながる」、「自分が理解していることを周囲の人に伝える勇気を持つことが大切」など個人が理解し、それを地域へ波及することを見通していた。

6. おわりに

本稿では3つの研修会の概要を報告した。教育については、いずれの研修会においても、看護学生からは地域住民との関わり方や看護職としての気づきを得ており、本事業はESDを通して持続可能な社会づくりの担い手を育む機会となっていた。今後は、看護学生への参加の効果を明らかにすることで授業に組み込むことや、積極的に各科目で現在の内容とSDGsとの紐づけを明らかにして教授することが必要である。地域貢献についてはコロナ禍で活動が制限されてきたが、2022年頃より、学外参加者の増加や学外での開催となり、本格的な地域貢献活動へとつながりを見せ始めている。今後は、さらなる地域貢献としての機能を果たすため、「地域住民の参加」および「出前開催」を継続・拡大させていくこと、SDGs達成に向けて個人レベルでの行動レベルにすること、大学での取り組みをPRすることが課題として挙げられる。

謝辞

本事業は、令和2年度～令和5年度石川県立看護大学附属地域ケア総合センター地域貢献事業「わたしとみんなの未来を変えるSDGs」(代表者:

寺井梨恵子)の助成を受けて実施したものである。本事業に参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

利益相反

なし

引用文献

- 1)外務省：SDGsとは？. JAPAN SDGs Action Platform.
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> (accessed 2022/5/4)
- 2)SDGs Transformation Center：Sustainable Development Report 2023,
<https://s3.amazonaws.com/sustainabledevelopment.report/2023/sustainable-development-report-2023.pdf> (accessed 2023/6/24)
- 3)SDGs推進本部：SDGsアクションプラン2020.
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/dai8/actionplan2020.pdf> (accessed 2022/6/5)
- 4)内閣府：地方創生 SDGs.
<https://future-city.go.jp/sdgs/> (accessed 2023/12/26)
- 5)文部科学省：持続可能な開発のための教育(ESD：Education for Sustainable Development).
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm> (accessed 2022/6/28)
- 6)文部科学省：「ESD(持続可能な開発のための教育)推進の手引」(改訂版)について. 文部科学省国際統括官付日本ユネスコ国際委員会, 4-10,2018.
- 7)文部科学省：第3期 教育振興基本計画(本体)平成30年6月15日閣議決定.
https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf (accessed 2022/9/25)
- 8)SDSN Austraria/Pacific：オーストラリア、ニュージーランド、太平洋版 大学でSDGsに取り組む 大学、高等教育機関、アカデミアセクターへのガイド.
https://sdgs.okayama-u.ac.jp/assets/upload/files/University-SDG-Guide_web_JP.pdf.pdf (accessed 2023/11/25)
- 9)United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization(UNESCO)：Sustainable development begins with education：how education can contribute to the proposed post-2015 goals, UNESCO, Paris, 2014.
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000230508> (accessed 2023/11/26)
- 10)UNESCO：Education for people and planet：Creating sustainable futures for all, Global Education Monitoring Report, UNESCO, Paris, 2016.
<https://uis.unesco.org/sites/default/files/documents/education-for-people-and-planet-creatingsustainable-futures-for-all-gemr-2016-en.pdf> (accessed 2023/11/26)
- 11)平本督太郎, 北川達也：SDGsの概要と動向および金沢工業大学におけるESDの取り組み. 教育システム情報学会誌, 38(2), 118-128,2021.
- 12)高橋幸子：看護系大学におけるSDGsの取り組み～HPにおける情報発信の現状から～. 目白大学 健康科学研究, 16,11-15,2023.
- 13)朝日新聞：2030SDGsで変える【第9回SDGs認知度調査】「SDGsに関心あり」が初の過半数 最も認知度が高い世代は10代.
https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey09/ (accessed 2023/4/28)
- 14)International Council of Nurses：看護師: 主導する声 持続可能な開発目標の達成 2017年国際 看護師の日 抜粋和訳.
<https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/katsudo/pdf/2017.pdf>(accessed 2022/6/9)
- 15)杉下智彦：持続可能な開発目標(SDGs)の背景と国際展開－グローバル・ヘルスと健康の社会デザイン－. 保健医療科学, 68(5), 372-379,2019.
- 16)日本看護協会：日本看護協会のSDGs実現に向けた取り組み.
https://www.nurse.or.jp/home/about/jna_sdgs/index.html (accessed 2023/11/27)
- 17)杉下智彦：世界を変える「看護」の力: グローバル・ヘルスにおける新たな挑戦 第21回聖路加看護学会学術大会 基調講演, 聖路加看護学会誌, 20(2), 12-15,2017.
- 18)神谷栄子：学びの場から 看護学生のSDGsに関する意識 生徒・学生へのSDGs教育を実践するための研究. 看護実践の科学, 45(12), 89-94,2020.
- 19)篠原良子：看護学生が考えるジェンダー・バイアス－SDGsにおける平等の視点から－. 三育学院大学紀要, 13(1), 89-93,2021.
- 20)Elizabeth.BP, Yastremska.SO, Larisa. F, et al.: Sustainable Development Principles in Health Promotion and Nursing Education. МЕДИЧНА ОСБИТА, 4, 67-73, 2019.
<https://doi.org/10.11603/me.2414-5998.2019.4.10863>
- 21)Cho MK, Kim MY: Factors Affecting the Global

- Health and Cultural Competencies of Nursing Students. *International journal of Environmental Research and Public Health*, 19(7), 4109, 2022.
<https://doi.org/10.3390/ijerph19074109>
- 22) Gürgen Şimşek H, Erkin Ö: Sustainable development awareness and related factors in nursing students: A correlational descriptive study. *Nurse Education in Practice*, 64, 103420, 2022.
- 23) Lilienfeld E, Nicholas PK, Breakey S, et al.: Addressing climate change through a nursing lens within the framework of the United Nations Sustainable Development Goals. *Nursing Outlook*, 66(5), 482-494, 2018.
<https://doi.org/10.1016/j.outlook.2018.06.010>
- 24) Goodman B: The need for a 'sustainability curriculum' in nurse education. *Nurse Education Today*, 31(8), 733-737, 2011.
<https://doi.org/10.1016/j.nedt.2010.12.010>
- 25) Hassmiller SB, Kuehnert P: Building a culture of health to attain the sustainable development goals. *Nursing Outlook*, 68(2), 129-133, 2020.
<https://doi.org/10.1016/j.outlook.2019.12.005>
- 26) Upvall MJ, Luzincourt G: Global citizens, healthy communities: Integrating the sustainable development goals into the nursing curriculum. *Nursing Outlook*, 67(6), 649-657, 2019.
<https://doi.org/10.1016/j.outlook.2019.04.004>
- 27) 藤本徹：ゲーム学習の新たな展開.放送メディア研究, 12,235-252,2015.
https://www.nhk.or.jp/bunken/book/media/pdf/2015_34.pdf (accessed 2023/12/26)
- 28) 株式会社Project Design：SDGs de 地方創生.
<https://www.projectdesign.co.jp/service/sdgslocal/> (accessed 2023/11/27)
- 29) 特定非営利活動法人イシュープラスデザイン：風水害24.
<https://issueplusdesign.jp/fusuigai24/> (accessed 2023/11/27)
- 30) 特定非営利活動法人イシュープラスデザイン：認知症世界の歩き方.
https://issueplusdesign.jp/dementia_world/?openExternalBrowser=1 (accessed 2023/11/27)

Development of a Course on the SDGs in the University's Local Contribution Projects

Rieko TERAJ, Chisato MATSUMOTO, Kiyoka SETO

Abstract

Since 2020, we have been conducting the course, "SDGs that Will Change the Future for Me and Everyone," as a local contribution project at the Community Care Center affiliated with our university. This study outlines the content of the questionnaires (open-ended responses) conducted so far for university students, faculty and staff, high school students, and local residents after their participation in the introduction and three workshops. In the "SDGs de Regional Revitalization," participants learned about the nature, sustainability, and impact of the SDGs such as "we cannot sustain the town by only thinking about our personal interests." Storm and Floods Damages 24 informed them of aspects related to one's preparedness by "understanding how you are likely to think and behave during disasters." Furthermore, How People Navigate the World of Dementia reinforces the need to be empathetic and support people with dementia, tailored to each individual's requirements, such as by "being able to reconsider the way that we interact with people with dementia if we realize the reason for their particular behavior." In all of these cases, the nursing students gained awareness as professionals and learned to interact with local residents. This project is considered to nurture a sustainable society through ESD.

Keywords SDGs, ESD, Nursing, University student, Local contribution